

中学生・高校生のスポーツ継続要因に関する研究 —柔道競技者を対象に—

スポーツクラブマネジメントコース

5020A306-4 大島 茂男

研究指導教員：間野 義之 教授

第1章 研究の背景

近年、子どもの体力・運動能力の低下傾向が顕著になり、スポーツの実施者数も減少している。(笹川スポーツ財団、2002)

この問題を脱却するために、学校現場ではスポーツ実施や競技継続につながる学校体育(麓ら、2005)や運動部活動(藤田ら、1999)のあり方が問われている。

スポーツの継続に関する先行研究で、金崎ら(1995)は、中学生・高校生を対象に、スポーツ・コミットメントの得点が高い者ほど、スポーツ実施頻度が高いこと、さらに、今後もスポーツを継続していきたいという継続意図が高いことを明らかにしている。

一方、これまで、柔道競技継続理由に関する研究については、中学生、高校生そして大学生を対象に行われたものがあるが、口頭発表(橋本ら、1990、1991)にとどまっており論文としての報告は非常に少ない。しかし、柔道の意識(イメージ)(河崎ら、1974、尾形ら、1979、1980、高橋ら、1987、1994)や価値についての研究はされており、本研究を進めるうえで重要な示唆を与えてくれるであろう。(射手矢ら、2011)

柔道は、1882(明治15)年、嘉納治五郎が柔術の原理を研究して整理・体系化し、現在、世界204カ国以上の国と地域に普及(IJF HP、2021)し、オリンピック採用競技となった。しかし、近年は柔道競技者人口の減少(全柔連 HP、2021)が大きな問題となっている。(資料1)

このような状況下で、栃木県の中学校・高校には柔道競技者の人口減少(資料2)により休部や廃部を余儀なくされているチームが多数存在する。当初は、この現象に対し少子化(厚生労働省、2003)の影響、重大事故(内田良、2013)の発生件数の多さ、公立中学校の柔道部の減少・廃部(栃木県教育委員会、2017)及び

柔道専門の指導者不足(全柔連、2013)等が原因で、中学生・高校生の柔道競技継続者が減少していると認識していた。

第2章 先行研究

学生のスポーツ活動からの離脱・非継続要因に関する先行研究において、稲地ら(1992)は、部の統率力や計画性などの部機能の低下や技術向上が停滞した結果レギュラーになれなかったことを挙げている。

また、青木(2000)は、「人間関係の軋轢」や「練習の辛さ(厳しさ)」、「勉強との両立」及び「他にしたいことがある」ことなどを挙げ、またこれらとは別に内罰的理由が大きな要因であるとしている。

一方、スポーツ活動の継続要因に関する先行研究において、石原(2018)は高校生や大学生の柔道競技者を対象にした研究で、内なる感情により着目しているが、例えば、「柔道が好き」、「練習が楽しい」などの感情(柔道愛好要素)、「目標にしている選手がいる」及び「昇段したい」などの目標・目的(柔道到達目標要素)及び「家族・仲間との絆」、「指導者との絆及び尊敬する気持ち」などの内的環境(柔道内的環境要素)等が柔道継続要因であると述べている。

また、射手矢ら(2011)は、18歳から80歳までの男子柔道実践者(柔道群)と柔道以外のスポーツ種目を行っている者(非柔道群)を対象にアンケート調査を実施した結果、両群の継続理由における因子構造の共通点は、「人間形成」、「好感情」、「身体能力の向上または体力の向上」、「格闘技への好奇心」及び「精神性の向上」と述べている。

第3章 研究の目的

本研究は、中学生・高校生のスポーツ継続と関連のある要因を、柔道競技者を対象に明らかにすることを目的として、仮説の検証を試みる。

[仮説]中学生・高校生の柔道の継続に、石原(2018)の唱えた「柔道愛好」、「柔道到達目標達成」及び「柔道内的環境要因」は影響するのか？

第4章 研究方法

調査対象者は、栃木県内の中学校・高校の柔道部に所属している生徒を対象として、アンケート調査(資料4)を実施した。791名を有効回答とし、有効回答率は80%であった。

調査項目は、柔道継続を促す因子(資料3)の、9因子85項目から、柔道継続要因を明らかにするため、「問1.性別」、「問2.現学年」、「問3.柔道開始時期」、「問4.柔道開始場所」、「問5.柔道開始理由」、「問6.柔道継続理由」、「問7.柔道から得たもの」、「問8.自分自身の性格」、「問9.今後の柔道継続意志」及び「問10.問9で今後の柔道継続意志がない者と、どちらとも言えない者を対象に、「今後の柔道継続のための条件」を加えた。

第5章 結果

①アンケート調査(単純集計)の結果、栃木県の中学生、高校生の柔道競技者の実態が明らかになった。

②本研究における「対象者の属性」が明らかになった。

③クロス検定の結果、「柔道継続因子」の「性別」、「学年」、「柔道開始時期」、「柔道開始場所」の項目において、「柔道継続意図あり群」及び「柔道継続意図なし群」との間に有意な差が見られた。

④t検定の結果、「柔道継続因子」の全ての項目において、「柔道継続意図あり群」及び「柔道継続意図なし群」との間に有意な差が見られた。

⑤ロジスティック回帰分析による多変量解析の結果、中学生には「柔道愛好」、「柔道到達目標達成」、「性別」及び「学年(中学1年)」因子との関係が見られ、高校生には「柔道入門動機」、「家族支援」、「柔道到達目標達成」、「周囲との融和」、「性別」及び「柔道開始時期(中学校)」因子との関係が見られた。

第6章 考察

本研究は、石原、射手矢らの先行研究を支持する結果であった。これにより、中学生・高校生の柔道継続に「柔道愛好」、「柔道到達目標達成」、「柔道内的環境要因」は影響することが今回の研究で明らかになった。

石原との先行研究との比較においては、柔道継続要因の因子の「柔道愛好要素」、「柔道到達目標要素」及び「柔道内的環境要素」は、本研究の「柔道愛好」、「柔道到達目標達成」及び「柔道内的環境要因」と同じ因子要素であり、石原の研究した「高校生・大学生の柔道継続要因」と類似した結果になった。これにより、高校生・大学生の柔道継続要因の因子が中学生・高校生にも影響があることが証明されて、新たな知見となった。

また、射手矢らとの先行研究の比較においては、射手矢らの唱えた柔道継続要因の因子の「人間形成」、「好感情」、「身体能力の向上または体力の向上」、「格闘技への好奇心」及び「精神性の向上」は、本研究の「柔道愛好」、「柔道到達目標達成」及び「柔道内的環境要因」と同じ因子要素であり、射手矢らの研究とも類似した結果になった。これにより、中学生から80歳までの男子柔道実践者の柔道継続要因に共通の因子があることが証明され、新たな知見となった。

第7章 結論

本研究における調査・分析の結果から、検証を試みた仮説は支持される結果となり、中学生・高校生の柔道継続要因として、「柔道愛好」、「柔道到達目標達成」及び「柔道内的環境要因」は影響することが明らかになった。

今後、研究結果は全日本柔道連盟が、中長期的な基本計画の「普及」を図る上で、目標を達成するための重要なデータとなるであろう。

今回の研究で明らかになった、中学生、高校生の柔道競技の継続要因を踏まえて、今後、エビデンスに基づいての指導方法の確立や効果的な事例研究等を全柔連と関係機関と協力しながら具体的な提言に繋げていくことで、中学生・高校生の柔道競技継続者が増加することを祈願したい。